

アルケイアー記録・情報・歴史―
第一九号 二〇二四年十一月 五七―六七頁
南山アーカイブズ

モニター化／パッケージ化
―2000年以降の大学の変容―

加藤 隆雄
南山大学人文学部教授

Monitored / Packaging : Changes in University System since 2000.

Department of Psychology and Human Relations, Faculty of Humanities,
Nanzan University

KATO Takao

Archeia: Documents, Information and History
No.19 November, 2024 pp.57-67
Nanzan Archives

はじめに

一. 大学教育の三つの段階

二. 自己モニターする大学

三. 大学教育の第三の段階

モニター化／パッケージ化

―2000年以降の大学の変容―

加藤 隆雄

はじめに

大学（高等教育）の変化を捉える理論としてマーチン・トロウ（Trow 1976）の三段階説はあまりにも有名だが、その図式は現在の日本の高等教育においてどれだけの意味を持つのか。トロウによれば、高等教育の在り方は進学率によって、エリート段階（進学率一五％未満）、マス段階（二五～五〇％）、ユニバーサル段階（五〇％以上）に区別される。ユニバーサル段階においては、生涯学習への対応、学生集団の多様化、学習形態の多様化などが起こるとされる。一九七〇年代に安定して一五％を超え、この十数年五〇％を超えるか超えないかという状態にとどまっている日本の大学は、ユニバーサル段階への完全な移行を果たさないまま半世紀の間マス段階にあるということになる。ということであれば、この区分は現代の日本の大学における変化を捉える枠組としてほとんど意味を持たないようにも思われる。本稿では、筆者が勤務したおよそ四半世紀における南山大学の変化を跡付けながら、マス段階における大学教育の変質を捉える視点を提起し、今後の大学の在り方について考察したい（一）。

一・大学教育の三つの段階

トロウの図式を大学進学率による区分からいったん解放し、高等教育の、教育内容・方法に眼を向けてみると、この三つの段階に対応するような高等教育と大学組織自体の変遷が看取れるように思われる。その前に、トロウの議論には入り込まなかった日本の高等教育独自の要因について触れておく必要がある。一九六〇年代に大学紛争を経験し一九七〇年代にエリート段階からマス段階へと完全に移行したところまでは、欧米の大学と軌を一にしていた日本の大学だが、一九八〇年代には人口動態学的な要因によって動揺することになった。まずは、一九八〇年代の後半に起こった「大学進学バブル」という現象である。全く偶然にもバブル景気とほとんど同じ時期であり、そして偶然にも昭和から平成への移り変わりと一緒に起こったこの現象は、十八歳人口がピークに達したことによる大学入学偏差値の上昇というかたちをとった。受験産業が作った「日東駒専」や「大東亜帝国」という人口に膾炙するフレイズの登場は、ここに頭文字として取り上げられた、当時必ずしも難関として捉えられていなかった大学が、入学偏差値の著しい上昇を果たしたことに由来する。バブル景気が地価の上昇・株価の上昇というかたちをとったことを考えると、驚くべき相似だといえるかもしれないが、「大学進学バブル」はバブル景気の崩壊と同様に、大学進学日本の大学教育に長く続くダメージを残した。一九九〇年前後において、十八歳人口がピークに達したとしても、その時点における十七・〇歳の人口も、その減少のカーブも、はつきりと人口動態としてわかつていたはずだった。たとえば、喜多村（一九九〇）は、「大学淘汰の時代」として警告していた。十八歳人口が二〇〇〇年に向って減少し、少子化が劇的に改善する兆候もないことがわかっていながら、多くの有力な大学は定員の増加とキャンパスの郊外移転という「バブリーな」政策を取ったのである。自分の大学は学生獲得競争に勝利するという根拠なき自信でもあったのだろうか、やがてそうした大学の多くは、交通の不便さを解消できなかった郊外キャンパスが負の遺産となっていることを知る。二〇一〇年代以降にその清算をしなくてはならなかったことは読者もよくご記憶のことと思われる。

しかし、文部省の大学政策は緊縮には向かわず、アメリカに肩を並べるようなユニバーサル化を目指していた。つまり、大学

の定員増加や大学の新設を容認してきたのである。ここに、日本の大学のマス段階は、「大学の大衆化」と言い換えられてしまう状況を呈することになる。

日本の大学は、このような独自の要因にも影響されながら大学教育の転換点を迎えた。大学のエリート段階における教育は、学生自身の高い意欲・意識を前提とし期待するものであった。すなわち、大学は学生が学ぶ場であり、大学の授業は学生本人が主体的に学ぶきっかけを与えるものに過ぎなかった。大学教師は、きちんとした授業計画を立てていなかったし、そのため、大学の授業の板書を記録したノートは、あとから見ればちんぷんかんぷんなものでしかなかった。大学教育の核心は、まさに授業の外に在るのだという、今から考えると逆説的な思想が大学教育、特に人文系学部における教育の主流を占めていた。大学で何を学ぶかは、学問以外のことを含め、学生本人の資質と責任に帰された。これは高等教育の「学生本位」ないし「学生主義」と呼べるものであった。

これに対して、大学のマス段階＝大衆化は、大学教育の教育化・大学の学校化という現象をもたらした。エリート段階においては、大学卒業者は社会のなかで少数者であり、大学で何を学んだかということとはまったく関係なく「大卒」（当時としてもクラシックな表現でいえば「学士様」）だった。日本のマス段階においては、人は学歴だけでは判断できない、という新たな神話が流布することになった。そこへ大学生の学力低下という社会問題がもちあがる（戸瀬・西村二〇〇二）。これは当時のゆとり教育（による学力低下）の大学版とでもいうべきものだったが、文部省と関係する審議会は、増えすぎた大学への各種コントロールを打ち出していく。この最初のものの一つが南山大学でも二〇〇〇年代から始まった「学生による授業評価」の事実上の義務化であった。今となつては信じられないことかもしれないが、かつて大学の授業は「一〇分遅れて始めるのが（学生に対する）礼儀」と考えられていたふしがある。ところが、二〇〇〇年代に授業評価が導入されて間もない頃、筆者は先輩の先生が次のようなことを言っていたことを記憶している。

先輩教員「学生の授業評価の自由記述に書いてあることを読んで私はびっくりしました。『先生の授業がいつも五分遅れて始まる。何とかしてほしい』五分ですよ、たったの！」

もしかしたら、筆者の記憶が修正されていて、先輩の先生は一〇分と言っていたのかもしれない。まさか一〇分を「たったの」と言うはずがない、という現時点からの思い込みにより記憶が修正されたのかもしれない。ともあれ、二〇年でこれほどまで変わってしまったのである（二）。

一九九〇年代に東京大学の教養学部で採用されたテキスト『知の技法』（小林・船曳一九九四）は、大学教育の教育化の象徴である。大学での「学び」（この名詞もこの時代からよく使われるようになった）の前提となるアカデミックスキルの教育が、大学教育に正式に組み込まれるようになった。高校の学習内容を補習的に大学教育に組み込む大学も現れた。大学教育の教育化は、教育内容から教授法にも及ぶようになった（三）。エリート段階の大学では、授業の教育効果が問題になることは原理的になかった。なぜならば、学ぶ主体は学生なのだから。しかし、大学という「学校」に初等中等教育で開発された教授法が導入されることになった。この背景には、大学が初等中等教育とはまったく別の歴史を有することに対する無知があったのかもしれないが、大学だって学校でしょといわんばかりに、授業方法の改善がさまざまな形で義務化されていく。²⁾存知の通り、この代表がFD (faculty development) である。

マス段階における高等教育の変化、大学教育の教育化・大学の学校化に対応する変化、これは、先にエリート段階に対応すると述べた高等教育の「学生主義」から、「教員本位」ないし「教育主義」呼べるものへの転換であった。

さて、この変化には続きがあるのだろうか。ユニバーサル段階における大学教育の在り方というものはあるのだろうか。筆者は一つの意見を持っているが、その前に、大学に起きた教育以外の変化について述べておく必要がある。

二. 自己モニターする大学

毎朝体重を測り、記録する――

毎日の支出とその明細を書き残す――

二時間ほどの雑談を録音し文字に起こす――

日常の行為を、行為するだけではなく文字に記録して、それを眺めたり思い返したり解釈し直したり分析したりする。やりっぱなしではなくふりかえりを加える。即目的な行為の上に反省を折り重ねる。これらは、特殊な行為でもなければ、無益だと断定される行為でもない。

しかし、日常生活すべてにこれらの折り重ねをするとすれば、記録にも反省にもそれだけの時間がかかるために、行為生活の間は半分があるいはそれ以下になるだろう。日常生活の半分为行為、半分为そのふりかえりとなるわけだ。

前述したように文部省は大学に対するコントロールをさまざまな形で行使していったため、それらの「改革」に埋もれて見分げがつかなくなりがちだが、二〇〇〇年以降の大学にはこのような制度的ふりかえりが次々と導入された。少なくとも大学教員の行為について文字化して記録して報告する制度が導入され義務付けられ必要だと言われるようになった。

授業シラバスの作成と授業実施後におけるその評価・改善

授業評価をもとにした報告書作成

FD活動の企画運営・実施・記録など

自己点検の企画・実施・報告など

年度ごとの業績の報告書作成・入力

倫理審査に対応する書類の作成と指摘された事項に対する修正

会議の議事録作成

教員評価事項への対応と報告書作成

学外授業の報告

学内での業務に関するメールの作成・返信の作成・それに必要な書類の探索・調査・検討

・ ・ ・

意図的に省いたが、もちろん学生指導に関する幾多の事項がある。省いたのはとてもここで書ききれないからだ。

これらは、日常的な任意の自己啓発のようなものではなく、業務である。大学での教育に関わる行為とその組織されたものが次々に反省の対象として義務付けられていったのである。これも二〇〇〇年代の大学組織に要求されていたものだ。

しかし、これらを「ブルシット・ジョブ」(Graeber 2018)や「大学改革の迷走」(佐藤二〇一九)(四)だと言ってしまうと本質を見逃してしまうことになる。これらには社会的起源というべきものがある。それに関する有力な見解が、ミシェル・フーコーが「生権力(bio-pouvoir)」という概念で捉えた、近代社会において生活全般に及ぶようになったコントロールの在り方、アーキテクチャとでもいうべきものである(Foucault 1976、加藤二〇一四)。このようなコントロールの行使を、生活全般に浸透するミクロな監視権力・生の管理だとして批判する議論もあるが、ことはそれほど簡単ではない。なぜならば、このコントロールはよりよき生を目指す(とされる)ものだからだ。事実、上に挙げた様々な業務が、それ自体悪だという人はほとんどいないだろう。日々自己を反省することは、たとえばパラノイアックな行為だと言われても、少なくとも名目としては改善と向上(若者の好きな言葉を使えば「自己の成長」)を目指すものであるからだ。ここで「モニター」は単に監視という意味だけで用いるわけではない。自身を振り返り、問題点を発見する、わがふりを直すことを「モニター」と表現する。こうしたあり方を宇野(二〇一〇)は「オーディット文化」という概念を引き合いに出して説明しているが、ここでは「自己モニター」あるいは「折り重ね」と表現したい。自己モニターには時間を要する。端的に言って、大学教員の多忙化は、この自己モニターが業務として組み込まれたことによる。もちろん、大学での教育行為とそこから派生する事項のすべてが自己モニターの対象になるわけではないし、二〇〇〇年以前からなされていたこともある。あるいは二〇〇〇年以降で簡便になったものもあるかもしれない。しかし、自己モニター行為が、自発

的な任意の努力としてではなく、業務として義務的なものになったことこそ重要なことなのだ。即自的行為の上にそのふりかえりが折り重ねられたために、大学教育は二重になったという感触がもたれるようになったのである。イリイチの『シャドウ・ワーク』にならっていえば、大学教員には自己モニターという「影の」「支払われない労働」がひそかに強要されるようになったのである。つまり、二〇〇〇年代以降の大学教員は、即自的な教育労働とそれに折り重なった自己モニター労働という二重の労働をしなくてはならなくなり、向上とか改革とか改善といった言葉が、自己モニター労働が労働であることを隠蔽する言説として働くようになったということになる。賃金は、したがって、二倍払われなくてはならない。即自的な教育労働に対してと、自己モニター労働に対してである。あるいは、同じ賃金を維持しなければならないならば即自的な教育労働自体を二分の一にすべきである、という結論になる。

三三 大学教育の第三の段階

しかし、残念ながら筆者の過激な意見もここまでである。冒頭の議論に戻ってみよう。ここでユニバーサル段階に対応する大学教育の在り方を考えてみる。つまり、大学教員の教育力・指導力の向上の運動が行きつく果てのことである。大学の学問自体の多様性（教授内容）が維持されることは疑い得ないが、教授法・授業運営は次第にパターン化・類型化・一元化されていくであろう。大学淘汰ならぬ、様々に開発された大学教授法の淘汰である。たとえば、導入として学生の興味を引くような映像を見せる、次にグループを作ってそれについて話し合わせる、教員はそれぞれのグループでまとめられた見解を発表させる、・・・といった規格化された教授法へと収斂していくものと思われる。これが「教育のパッケージ化」とここで呼ぼうとするものであり、現在授業シラバスをカリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー体系のなかで機能的に位置づけていこうとする動きの中に姿を現わしている。規格化されたこのパッケージは、手順さえ習得していればグレートティーチャーの指導力のような、いわば捉えどころのない職人的な能力に左右されずに使えるものである。マス段階の大学教育でさかんに要求された大学教員の教育能力の向上という到

達点の見えない目標は、こうした教育パッケージの使用によって、いわばだれでも使用可能なものになる。エリート段階における「学生本位」「学生主義」から、マス段階における「教員本位」「教育主義」へと変化した高等教育が、次の段階（ユニバーサル段階という表現が適切なのかもはやわからないが）において取り得る形は、このような「パッケージ型」の教育であろうと予測できる。もちろん、パッケージ化された教育は本当の教育ではない、という意見はあるだろう。しかし、そのような意見が、マス段階で主流になった教育観にすぎないということを述べてきたのである。むしろ、パッケージ型の大学教育のメリットを勘案するべきではないだろうか。

パッケージ型の教育が授業研究と授業改善にかかる労力を軽減するであろうということは期待できる。あるいは、どうせパッケージなのだから、と言っては身も蓋もないが、複数の大学で同じ講義科目を同じ形で遂行できるようになるかもしれない（その手法はあえて書かないが）。前節で述べた自己モニター化が避けられないプロセスなのであれば、大学の中における教育行為自体を大幅に削減することはこうして可能になる、というのは樂觀的予測に過ぎないかもしれないが、大学本来の在り方の一つである研究行為の時間的確保ということを目指すための環境変革として、このような変化を積極的に評価するべきではないか、と考えられるのである。

注

- (一) 要点を簡潔に伝えるために、図表や引用は使用しなかった。また、筆者の思い違いや誤認も存在するだろうと思われるが、ご寛恕いただきたい。
- (二) 当時の記録として例えば（石浦二〇〇五）。
- (三) 大学教育の教育化についての代表的著作は、金子（二〇〇七）。
- (四) もちろん「よくぞ言ってくれた」という著作である。

文献

- Foucault, Michel (1976) *La volonté de savoir. Histoire de la sexualité*, Gallimard. (＝一九八六、渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ 知への意志』新潮社)
- Graeber, David (2018) *Bullshit Jobs. A Theory*, Simon&Schuster. (＝二〇二〇、酒井隆史・芳賀達彦・森田和樹訳『ブルシット・ジョブ』岩波書店)
- 石浦章一(二〇〇五)『東大教授の通信簿 「授業評価」で見えてきた東京大学』平凡社新書
- 加藤隆雄(二〇一四)『生政治の〈介入〉とはいかなる事態か―フーコー』『知の考古学』における権力作用の研究―』『アカデミア』人文・自然科学編・第七号、一―一四
- 喜多村和之(一九九〇)『大学淘汰の時代 消費社会の高等教育』中公新書
- 小林康夫・船曳健夫編(一九九四)『知の技法』東京大学出版会
- 佐藤郁哉(二〇一九)『大学改革の迷走』ちくま新書
- 戸瀬信之・西村和雄(二〇〇二)『大学生の学力を診断する』岩波新書
- Trow, Martin (1976) *The University in Highly Educated Society. From Elite to Mass Higher Education*. (＝一九七六、天野郁夫・喜多村和之訳『高学歴社会の大学』東京大学出版会)
- 宇野重規(二〇一〇)『〈私〉時代のデモクラシー』岩波書店(岩波新書)

